

第3節 歴史的環境

(1) 先史時代の竹田市

～竹田市域の縄文時代～

本市には旧石器時代から古墳時代にかけての多くの先史時代遺跡が分布している。出土数は少ないが、尖頭器や細石刃、細石核などの石器が出土しており、後期旧石器時代からの人々の活動の痕跡を窺うことができる。

縄文時代の遺跡は、大野川上流域の菅生・荻台地を中心に多く分布している。早期と後・晩期の遺跡が多く、野鹿洞穴のような洞窟遺跡も存在する。早期の遺跡からは、多量の縄文土器とともに拠点的な生活状況を示す複数の集石遺構が発見されている。土器編年の基準のひとつであるヤトコロ式は、縄文時代早期後半に位置づけられているヤトコロ遺跡から出土した押型文土器が標式となっている。また、多くの集石遺構が見つかった西園南遺跡は、にしそのみなみ 県下でも最大規模の早期の遺跡として知られている。

最も多くの遺跡が存在するのが後・晩期である。台地のほとんどの遺跡で研磨された黒色の土器や扁平打製石斧が出土している。特に扁平打製石斧は土掘具と考えられており、縄文農耕の存在について議論されてきた。そして、稲葉川流域でも下坂田西遺跡のような後・晩期の集落遺跡が確認され、広範囲に縄文時代の遺跡が広がることがわかってきた。その他、ぎよぶつ 御物石器と呼ばれる特殊な遺物や土偶も発見されている。



野鹿洞穴 県指定史跡

～大野川上流域の弥生・古墳時代～

弥生時代前半の空白期を経て、弥生時代後半から再び人々の活動が活発になる。いしいりぐち 石井入口遺跡のような大規模集落を中心に、数々の集落遺跡が菅生・荻台地に濃密に分布している。大野川上・中流域に特徴的なそせいがめ 粗製甕や石皿・すりいし 磨石類など縄文系の遺物やませいせきぞく 磨製石鏃などが多く出土し、また、銅鏡(破鏡)や鉄斧・刀子・手鎌・鉄鏃などの鉄器も出土している。台地を利用した畑作と広大な山塊における狩猟や採集が行われていたと考えられ、他地域との交流・交易も行われていた。水稻耕作を主体とする一般的な弥生時代のイメージとは異なる集落の様相を呈している。これらの集落は古墳時代前期まで続き、菅生台地の突端には前方後円墳2基を含むななつもり 七ツ森古墳群が築かれた。ところが、中期になると台地上から集落は忽然と消え、河川添いに小さな集落が営まれるようになる。そして、いちもち 市用横穴墓群のように溶結凝灰岩の崖面を利用した横穴墓(横穴墓群)が多く造営され、おうぎもり 扇森横穴墓やいなりやま 稻荷山横穴墓群ではよこはざいたびょうどめたんこう 横矧板鋌留短甲や馬具などの鉄器が副葬されていた。



七ツ森古墳群のC号墳(前方後円墳) 国指定史跡

～くじゅう連山南麓地域の弥生・古墳時代～

くじゅう連山南麓や大分川水系の^{せり}芹川流域においても、主に弥生時代中期から古墳時代にかけての集落遺跡が多く発見されている。脇^{わき}遺跡や都野原田遺跡^{みやこのはらだ}がその代表例で、出土した弥生土器は大野川上流域とは異なる様相を示し、大分平野の他、北部九州や肥後の土器が出土していることから、九州各地との活発な交流を窺うことができる。都野原田遺跡の近くでは、^{ぶつはるせんじんづか}仏原千人塚古墳群で前方後円墳と前方後方墳がそれぞれ1基確認され、中期の湯ノ上古墳^{ゆのうえ}も存在する。後期になると河川沿いに遺跡が点在するようになり、長湯横穴墓群の7号墓にはゴホウラ製貝釧やヤコウガイ製の装飾品、鹿角装の直刀・鉄剣などが副葬されていた。

(2) 古代

～『豊後国風土記』にみる古代の直入郡～

『豊後国風土記』によると、直入郡には郷四所、駅一所とあり、柏原郷と球草郷の2郷が記され、平安時代に編纂された『和名類聚抄』に三宅郷と直入郷の2郷が記されている。直入郡の由来は、「立派な桑の茂るところがあり、そこを直桑村と呼び、それをのちに直入郡と呼ぶようになった」という。柏原郷は、柏の木が多く茂っていたことに由来し、荻地域から菅生地区の^{うちざる}一帯を指し、打猿・八田・国摩侶という土蜘蛛^{ぐも}がいたところでもある。球草郷は、「^{くさいずみ}梟泉」がなまったものと考えられ、都野地区から長湯地区の一帯を指す。三宅郷は岡本地区の一帯と考えられるが、直入郷については諸説ある。



阿鹿野獅子 県指定無形民俗文化財

『豊後国風土記』に出てくる「宮處野」は景行天皇が土蜘蛛を征討するために行宮^{かりみや}を建てたところで、都野地区の宮處野神社の傍に「景行天皇祠」があったとされる。この他、城原地区の城原八幡社や菅生地区の禰疑野神社なども景行天皇の土蜘蛛征討に関わる神社である。宮處野神社付近の石田遺跡からは古代の官衙的建物跡が発見され、周辺の遺跡からは墨書土器や硯などの遺物も出土した。

天平8年(736)の『豊後国正税帳』の記載から、直入郡の正税稻穀及び水田が他郡に比して非常に少ないことがわかる。代わりに『正税帳』に記されているのは、原野の「^{まき}牧」として利用と、染料となる「^{むらさきくさ}紫草」の栽培である。古代の直入郡は、「野」と呼ばれるくじゅう連山及び阿蘇外輪山から広がる広大な高原地域の草地を利用した^{ぼくば}牧馬と、古代における高貴な色の染料であった紫草の生産を、水田の乏しい郡を支える糧としていたと考えられる。

(3) 中世

～良兵を出した直入郡～

直入郡は古代より馬を操り狩獵を行う「^{きりょうのこ}騎獵之児」が活動する土地柄であった。鎌倉時代、建久4年(1193)の「富士の巻狩」のため、源頼朝の命により阿蘇大宮司のもとで巻狩の神事作法を学んだ梶原景高と仁田忠常が、その帰りに久住山で巻狩りを試し多くの獲物を得たが、久住山は殺生禁断の霊場であった。頼朝は供養のために山麓にあった慈尊院に寄進し、その名称を猪鹿狼寺に改めたと

伝わる。この地域には牧と狩猟の伝統があり、「騎獵之児」が大宰府を守る役割を担うなど、兵の要となっていたと考えられる。また、弓の達人として知られた源為朝は、豊後国の「おとなしがはら」に住み、各所で戦いを起こし、3年で9国を攻め落とし、自ら「惣追捕使」を号した。「おとなしがはら」の地名は現在残されていないが、直入郡には為朝の伝説がいくつか残されている。



穴森神社の岩窟

また、『平家物語』巻八の「緒環」に緒方三郎惟栄にまつわる大蛇伝説が登場する。惟栄は「恐ろしき者の末にてぞ候ひける」とあり、姥ヶ岳（祖母山）に棲む大蛇と里の娘の間に生まれた「あかがり大太」の末裔で、九国一の兵になったと記されている。祖母山麓の姫岳地区にある穴森神社の社殿の裏には、大蛇が棲んだという洞窟がある。惟栄は平氏追討の功労者であり、平氏討伐後に頼朝と仲違いした源義経を岡城に匿う計画であったが、義経一行が乗る船が難破したため豊後行は頓挫し、惟栄も捕縛されて群馬県沼田へ流された。

～南郡衆が躍動した大友支配下の直入郡～

鎌倉時代になると、大友氏が豊後国守護となる。直入郡の支配は一族の志賀氏・入田氏・朽網氏・田北氏に任せられ、大野郡の各領主とともに南郡衆と称された。大野川上流域を支配したのは志賀氏と入田氏である。志賀氏は初代大友能直の八男能郷を祖とし、延応2年（1240）に大野荘志賀村（豊後大野市朝地町）の地頭職を譲られて土着し、志賀氏を名乗るようになった。本格的な直入郡進出は直入郷の代官職と検断職を預けられた応安2年（正平24年・1369）以降と考えられ、そのうち北志賀氏は岡城を拠点とし、南志賀氏は白丹地区の南山城を拠点とした。一方、入田氏は入田地区の津賀牟礼城を拠点としたが、天文19年（1550）の二階崩れの変で没落した。天正14年（1586）の島津侵攻（豊薩戦争）では、南郡衆が最前線の防御にあたった。北志賀氏の志賀道益、南志賀氏の志賀道雲、入田氏の入田義実などは島津氏に内応しその侵攻を援けた。そのような状況下で、道益の子である志賀親次は島津義弘の侵入を防ぐために岡城に拠った。岡城を死守し果敢な反撃作戦を展開し、豊臣秀吉から賞賛されている。また、親次は熱心なキリスト教信者でもあった。彼にまつわるエピソードは宣教師フロイスがまとめた『日本史』に数多く記されている。

大分川支流の芹川流域を領したのは朽網氏と田北氏である。朽網氏は都野地区の山野城を拠点としたが、16世紀前半に朽網親満が大友氏に討伐された後、入田氏出身の鑑康（宗歴）が朽網氏を継承した。山野城の麓にある上城遺跡からは、居館跡と考えられる掘立柱建物35棟とこれを区画する溝状遺構が検出され、白磁や青磁などの中国産陶磁器が出土している。小路遺跡からも法花壺や華南三彩の輸入陶磁器や京



原のキリシタン墓碑 県指定史跡

都系土師器が出土し、府内と似た出土傾向を示す点で注目される。キリスト教の布教活動が豊後国の中でもいち早く行われた場所であり、ルカスという信者により16世紀後半には豊後国で最初の教会が建てられたと伝わる。日本八大布教地のひとつにも数えられ、長湯地区の原や日向塚に石製の十字架の一部が残っている。一方、田北氏は下竹田地区の松牟礼城や田北城を拠点とした。朽網親満討伐の後に台頭するも、耳川の戦いで田北鎮周他多くの郎党を失い、紹鉄が反乱を起こして討伐された。

(4) 近世

～中川氏による岡城の築城と城下町の建設～

大友氏が豊後国から去った後、文禄3年(1594)に播磨国三木(兵庫県三木市)より移封となった中川秀成がこの地(直入・大野郡6万4千石)の領主となった。明治4年(1871)の廃藩置県までの約277年間、移封などなく中川氏13代による統治が続いた。

秀成は岡城を居城に定め、すぐに城の改修に着手した。志賀氏居館跡の西側に位置する天神山を本丸とし城域を西側に拡大し、志賀氏時代の大手であった下原門を搦手とし、新たに大手門と近戸門を開き、慶長元年(1596)に一応の完成をみた。岡城は断崖絶壁上に石垣が連なる近世城郭へと姿を変え、寛文4年(1664)に3代藩主中川久清により西の丸が整備され、新たに御殿が造営された。

秀成はまた城下町の建設にも着手した。岡城周辺は山がちな地形であったため、できる限り広い平地を確保することができた竹田村近辺の湿田地帯と藪林が切り開かれ、城下町として町割りが行われた。そして、中央の商家や町家を取り囲むように、周辺に寺院と武家屋敷が配置された。町は本町・新町・府内町・田町・上町の5町を中心に構成され、寛文5年(1665)に古町が新たに形成された。この古町には寛永13年(1636)に銭座ができ、寛永通宝を3年間鑄造している。「竹田千軒」と称されるように城下町には商家や町家が所狭しと建ち並び、天明3年(1783)に城下町を訪れた備中国の古川古松軒は「町は大概よき町にして諸品自由の地也。是は四、五里の間、商町一ヶ所もなき事にて、万事此城下ならで調ひかたきゆへ、何に不足なきやうに商人のたくはへ置と見へたり。寺院も多数見へ侍りき」(『西遊雑記』より)とその繁栄ぶりを今に伝えている。



岡城跡(大手門跡) 国指定史跡



碧雲寺の初代藩主中川秀成の肖像 県指定有形文化財

～岡藩の繁栄と文化の成熟～

岡藩中興の英主として称えられる3代藩主久清は、領内の検地を行い、諸制度を改革した他、岡山藩より旧知の熊沢蕃山を招き、その経済講義を受けて植林や木原井手（現在の城原井路）などの水路開削を行った。久清の墓所は大船山中腹の鳥居ヶ窪に造営され、久清が登山に使用したと思われる「人馬鞍」が伝わる。8代藩主久貞も藩政改革に取り組む中、由学館・経武館・博済館の3つの藩校を開き、藩士子弟の教育に力を注いだ。結果として、岡藩における文化の成熟の機運が高まり、田能村竹田などを輩出するに至った。10代藩主久貫は横山甚助を起用し「新法改革」を行うも、領民の反感を買い、文化8年（1811）に四原一揆が発生し、他藩にも飛び火した。12代藩主久昭の時に明治維新を迎え、13代藩主久成の時に廃藩置県を迎えた。



田能村竹田の山水図（秋景山水図）

～田能村竹田と豊後南画～

文人画家として名高い田能村竹田は岡藩侍医田能村家の二男に生まれ、城下町を見下ろす高台にある旧竹田荘は彼の住まいであった。『豊後国志』編纂に携わった後、四原一揆を機に37歳で隠居し、その後は遊歴を繰り返しては各地の文人墨客と交遊し、中国画の研究を通して画技を深め、ついには独自の画世界を展開した。また、帆足杏雨や田能村直入ら多くの南画家に影響を与え、近世末以降の大分の美術に与えた影響は大きく、「豊後南画」という呼称が生まれる程、地域に根付いた芸術文化が展開していった。

～岡藩と温泉～

岡藩領には七里田温泉・葛淵温泉・湯原温泉（現在の長湯温泉）などの温泉場があった。温泉場には藩営の湯屋や御茶屋が建設され、藩主も度々湯治に訪れた。長湯温泉の「御前湯」の歴史も近世に遡る。安永10年（1781）に中川寛得軒（老職古田ひろやす）の「御見立て」によって建てられた湯屋が「御前湯」の前身となっている。



肥後街道に架かる神馬の石橋 市指定有形文化財

～肥後藩久住手永と天領12村～

小藩分立となった豊後国において、直入郡の大半は岡藩領であったが、久住村と白丹村は肥後藩領の久住手永に、下竹田地区の12村は府内藩領から天領（幕府領）になった。熊本城下と豊後国鶴崎を結ぶ参勤交代道（肥後街道・肥後往還・豊後街道）が、直入郡の北部を横断するように久住手永を通過し岡藩

領へ抜けている。久住町には会所が置かれ、熊本藩主の宿泊所であった御茶屋を起点に本町筋が南へ延び、御茶屋下で鉤の手に道路が曲がり、東方へ横町・田町・向町・新町へと続き、街道を支える宿場町が形成された。肥後街道沿いには神馬橋や境川橋などの石造車橋が架けられ、明治時代になると知事様塔が建てられた。

(5) 近・現代

～廃藩置県と岡城～

明治4年(1871)の廃藩置県により城主の中川久成^{ひさなり}は東京へ移住した。『^{けんちがいりやく}縣治概畧 第五』によると、明治7年(1874)3月30日に、城としての役目を終えた「旧岡城内 建物六十九棟」が売払入札にかけられた。これにより岡城内の建造物は破却され、石垣のみが残る城跡となった。城内にあった^{みたけしゃ}莊嶽社は玉来地区^{ときわやま}拝田原の常磐山に移転し、新たに中川神社が創建された。その社殿は城内から移築されたもので、この時に銅鐘(サンチャゴの鐘)も城内から移された。

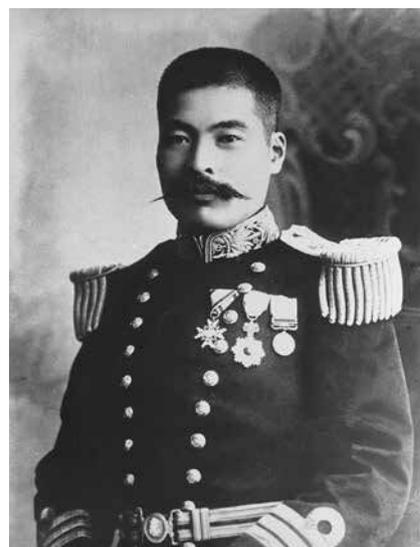
～瀧廉太郎、渡辺長男、朝倉文夫、佐藤義美、広瀬武夫～

明治期になり荒廃していくばかりの岡城跡であったが、そこを遊び場としたのが少年期の瀧廉太郎^{たきれんたろう}であった。廉太郎は日本の西洋音楽受容期に活躍した夭折の音楽家で、「お正月」「花」「荒城の月」など数々の名曲を残した。明治24年(1891)12歳の時、父について竹田町へ引越し、以後約2年半の間、多感な少年期を竹田で過ごし、直入郡高等小学校に学んだ。

この他、東京日本橋の麒麟像の作者として知られる彫刻家^{わたなべ}渡辺長男^{おさお}は旧岡藩士渡辺家の出身で、その実弟で「東洋のロダン」と称された彫刻家^{あさくらふみお}朝倉文夫は直入郡高等小学校を卒業した。「犬のおまわりさん」で知られる童謡・童話作家で詩人の^{さとうよしみ}佐藤義美もまた本市の出身である。そして、「軍神広瀬中佐」として親しまれた^{ひろせたけお}広瀬武夫も本市の出身で、日露戦争に従軍し旅順閉塞作戦で戦死したが、武夫の人格と報国の精神を敬仰する人々により、昭和10年(1935)に広瀬神社が建立された。



滝廉太郎



広瀬武夫

～西南戦争と城下町の近代化～

明治10年(1877)の西南戦争では、西郷軍が大分県に侵攻し、竹田町から三重町、白杵町を席卷し県南方面へと撤退した。竹田町は西郷軍に占領され、堀田政一らが結成した報国隊も西郷軍に加わった。竹田地区の茶屋の辻周辺が主戦場となった他、竹田町の大部分が焼失するなど大きな被害が出た。竹田町は町家が密集しているため、度々大火に見舞われてきた。町内への十分な用水(生活・防火)を確保することが長年の懸案であったが、玉来

川の水を^{ずいどう}隧道で竹田町に引込み稲葉川へ通す「稲葉川疎水計画」が明治13年（1880）に完成した。この豊富な水資源は産業にも活用され、^{しざんしゃ}四山社製糸工場が営まれた他、明治32年（1899）には竹田水電株式会社が設立され、翌年に竹田町・玉来町・豊岡村へ大分県初の電力供給が行われた。

大正6年（1917）に竹田－犬飼（豊後大野市）間の乗合自動車定期便が営業を開始、そして宮地（熊本県阿蘇市）・三重（豊後大野市）・久住など各方面への路線整備が竹田町を中心に整えられた。大正13年（1924）に豊後竹田駅が開業、そして阿蘇外輪山を越える難工事を乗り越え、昭和3年（1928）に大分県最後の駅豊後萩と熊本県側の波野・滝水の両駅が開業して豊肥本線が全線開通した。竹田町は奥豊後の中心地として、大分－熊本間の中間地の重要地点として栄えた。近隣の町村から多数の買い物客が押し寄せ、街は大いに賑わっていた。

～近代化農業遺産の宝庫～

水田耕作には適地とは言い難い厳しい地理条件であったが、市内各所には水田が開かれ、随所に棚田などの風景が見られる。これは先人たちの農業用水獲得のための努力の結果であり、藩政時代より多くの井手の開削が行われてきた。明治期には隣接する豊後大野市の緒方平野まで水を通すような大規模な灌漑事業が行われた。^{ふじお}富士緒井路は大野川上流を水源とし、明治44年（1911）から大正3年（1914）まで開削工事が行われ、昭和13年（1938）には取水口上流に^{はくすいためいけえんてい}白水溜池堰堤（白水ダム）が完成している。^{めいせい}明正井路は緒方川上流を水源とし、大正6年（1917）から大正12年（1923）にかけて開削工事が行われた。大正8年（1919）に完成した第一^{せっこうきょう}石拱橋（竹田市門田）は6連アーチで、橋長78mは県内最長である。市内には、円形分水で知られる^{おとなし}音無井路、^{ささわたせっこうきょう}笹無田石拱橋と^{かがみせっこうきょう}鏡石拱橋をもつ^{わかみや}若宮井路、石垣井路として知られる^{めいじおかもと}明治岡本井路など、明治・大正期に築かれた灌漑設備が今なお現役で広範な農地を潤し、特有の農村風景を形成してきた。水田耕作に適さない台地や高原地域では、高原野菜の生産や畜産が盛んに行われ、県内有数の産地を形成してきた。くじゅう連山南麓に明治35年（1902）に大分県種畜場（現在の^{大分県農林水産研究センター畜産試験場}）ができ、黒毛和牛のブランド「豊後牛」を産出するなど大分県の畜産技術発展に大きく貢献している。



白水溜池堰堤水利施設 国指定重要文化財



音無井路十二号円形分水

※井手・井路…ともに田畑へ用水するための農業用水路の呼称。

※石拱橋…石造のアーチ橋（車橋）のこと。

～久住高原と長湯温泉～

くじゅう連山南麓に広がる久住高原とそこに湧出する温泉は地域の貴重な観光資源でもある。昭

和3年（1928）の豊肥本線の全線開通もあり、くじゅう連山の登山客と点在する温泉地への湯治客で地域は賑わいを見せ始めた。竹田への道路は久住高原の玄関口に通じる重要な路線となり、昭和9年（1934）に「阿蘇くじゅう国立公園」の指定を受けたが、この指定には国際観光ルートの開発が念頭にあった。しかし、別府と阿蘇を結ぶルートは昭和39年（1964）の九州横断道路の開通を待たねばならなかった。この頃から観光需要を見込んだ開発が本格化し民間資本の参入が相次いだ。この地帯一帯の草地は古くから地元住民によって維持管理されてきたものであり、昭和期の大規模開発からも草地は守られ、雄大な景観が今日まで維持されるに至った。



くじゅう連山と久住高原

長湯温泉の歴史は藩政時代に遡るが、昭和初期に「東方日本の長湯温泉、西方ドイツのカルルスバード」と宣伝し、全国的に知られるようになった。湯治場としての機能を有し、芹川の川辺にあるガニ湯を中心として展開し、与謝野鉄幹・晶子夫妻ら多くの文人も訪れた。昭和53年（1978）に国民保養温泉地に指定、昭和63年（1988）に入浴剤メーカーが源泉成分を分析して「日本一の炭酸泉」と命名し、全国的な知名度が増した。平成10年（1998）に拠点施設として温泉療養文化館「御前湯」が開業し、平成18年（2006）にラムネ温泉館、令和元年（2019）にクアパーク長湯が開業した。古くからある旅館と新しい施設が上手く連携を図りながら今も多くの湯治客を迎え、近年の長湯温泉への年間観光客は80万人に及んでいる。また、平成11年（1999）には温泉療養文化館「御前湯」とバートクロツィンゲン市（ドイツ）の温泉施設「ヴィタクラシカ」の間で姉妹温泉施設の締結が行われたのを契機として、旧直入町とバートクロツィンゲン市の間でも友好姉妹都市として国際交流が盛んに行われてきた。



長湯温泉とガニ湯